

名張と観阿弥

尾本頼彦(能楽研究者)

1. 名張市・伊賀市の能楽史跡めぐり

- 観阿弥ふるさと公園・「観阿弥創座之地」記念碑
・能舞台(名張市上小波田)
- 近鉄名張駅前の「翁面を持つ観阿弥像」
- 名張市役所前の「翁を舞う観阿弥像」
- 近鉄名張駅横断路の「翁演能のタイル画」
- 宇流富志禰神社の藤堂家寄贈能面
- 伊賀市世阿弥公園と世阿弥の母の像
- 伊賀市八幡神社の「夢跡一紙(むせきいっし)」の碑



①こんなにも多くの観阿弥や世阿弥の母親の銅像が立っているような能楽史跡に恵まれた地域は全国でも名張市以外にはありません!

②名張市の数多い能楽史跡の中で、一番重要なのが美旗地区の「観阿弥ふるさと公園」と名張駅前の翁面を持つ観阿弥像です。

2. わらび座のホームページにある観阿弥の紹介記事

…下線部は間違いか、問題のある記述。カッコ内の→が修正記述

観阿弥 (1333年~1384年) 享年52歳

- 三重県伊賀出身。申楽の家に生まれ(→問題点は後述)、専門家として育った。幼名は観世丸。長じての名は清次(きよつぐ)。
- 大和申楽の中の山田申楽の出で、「であいの座」から独立し、伊賀の小波多というところで観世座を建てた。のちに大和の結崎に移り、結崎座を組織(→大和の結崎座に加入)。次第に旺盛な活動となる。同時期に、奈良の興福寺と春日大社の庇護のもとに入り、14世紀の終わりには、足利義満にひきたてられ、義満の同朋衆となる(→愛顧を受ける)。
- 1384年の初夏、駿河国大宮(静岡県富士宮市)の浅間神社にて巡業中、華やかな舞台で観客を魅了したのちに発病し、同地で死去する。
- 演技者としては、老若男女から鬼畜、草木の精まで演じつくす、実に強力な芸の力を持った人物。さらに、大和申楽の一つを高度な総合芸術として高い境地で完成させた、天才的な創造者。
- 作品の特徴は、表現が自由で、対話が生き生きとした点。また、「現在能」といわれる、時間がストレートに進行して逆戻りしないという性質を持っていた。
- 諸国の大衆を大変大事にする思想を持っていた。そのため、観阿弥の理解者、支持者群は諸国の非常に広範囲に広がっていた。

「衆人愛敬を以て一座建立の寿福とせり」意味…広い大衆に訴えかけ、大衆に理解される事が、一座の存続・繁栄となる。

【代表的な作品】 「自然居士」 「嗟峨大念仏の女物狂」 「卒都婆小町」 「静が舞の能」 「通小町」 「融の大匠」

①名張は観阿弥創座の地[「観世の座」が創座された所]

②名張市小波田は「観世の座」の翁面が見いだされた所

3. 比奈知地域に伝わっている観阿弥の伝承

「三重新報」平成2年9月5日号の記事

滝之原上出の住人等「観阿弥高座講産声」石殿発掘1周年を記念!



- ・観阿弥夫妻の墓所、「高座の石殿」[滝之原上出と青山町種生境の山中]
- ・仏頂山観音寺[上出小場集会所]の大正八年四月にお堂改修したときの額
北畠親房の家臣、玉井大膳がこの十一面観音を信仰し、靈験あらたかであったことが記されている。
- ・9/2 に石殿前で行われた供養会に参列した地元の古老たちは「玉井大膳というのは、北朝から追われる身だった観阿弥の偽名」という話は、昔、母親から聞かされた記憶がある」などの秘話が披露された。

4. 能楽(猿楽)が将軍・貴族に認められるまでの道のり

①観阿弥以前の芸能…田楽の一忠と曲舞の乙鶴

天皇・公家貴族の芸能— 雅楽

鎌倉武士の芸能— 田楽・宴曲（早歌）

庶民の芸能— 田楽・猿楽・曲舞・白拍子・平曲



室町幕府の芸能として、猿楽が認められる上で、観阿弥の功績が大きい。

呪師系の芸たる『式三番（翁猿楽）』を演ずるための座が 鎌倉時代になって作られた。

[大和四座]

円満井座…興福寺、春日若宮への参勤のための座

坂戸座…法隆寺への参勤のための座

外山(とび)座・結崎(ゆうざき)座…多武峰への参勤のための座。のちに興福寺、春日若宮へも参勤

・鎌倉時代は田楽が鎌倉武士の芸能であった。したがって、田楽に一忠・喜阿弥などの名手が輩出した。

『申楽談儀』(序)

「一忠(デンガク)・清次法名観阿弥・犬王法名道阿・亀阿、是、当道の先祖といふべし。彼一忠を、観阿は、「我が風体の師也」と申されける也」

『申楽談儀』(第八条) 観阿、節の上手也。乙鶴がかり也」

『五音』 くせまい道の事、…昔、白髭ノ曲舞ヲ、亡夫申楽ニ舞出シタリシヨリ、当道ノ音曲共ナレリ。…道ノ曲舞ト申ハ、上道・下道・西岳・天竺・賀歌女也。(乙鶴、此流ヲ亡夫ハ習道アリシ也)。賀歌ハ南都ニ百万ト云女曲舞ノ末ト云。…観阿弥は曲舞の技術を乙鶴から学び、猿楽を人気のある芸能にした。

②南阿弥陀と将軍足利義満と今熊野の申楽

『申楽談儀』(17条)

「翁をば、昔は宿老次第に舞けるを、今熊野の申楽(1374/応安7)の時将軍家、初めて御成なれば、一番に出づべき者を御尋ね有べきに、大夫にてなくてはとて、南阿弥陀仏一言によりて、清次出仕し、せられしより、是を初めとす。よつて、大和申楽、是を本とす」

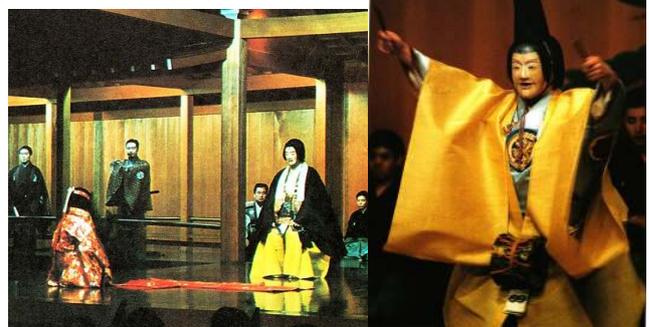
(21条) 観阿、今熊野の能の時、申楽と云事をば、将軍家御覧初めらるゝ也。世子十二の年也。

…今熊野の申楽で将軍義満に観阿弥・世阿弥が認められ、猿楽が室町幕府の芸能となった。

③観阿弥作能《自然居士》と将軍義満

『申楽談儀』序「観阿(観阿弥)」

「大男にていられしが、女能などには細々となり、自然居士などに、くろかみき、かうざになをられし、十二三ばかりに



見ゆ。「それ一代のけうぼう」より、うつりうつり申されしを、
ろくをんみん(将軍義満)、世子(世阿弥)に御むかい有て、「ちごはこまたを
 かかうと(父をまかそうと)おもふ共、ここはかなふまじき」
 など、御かんのあまり御りこう(冗談)有し也」

…**観阿弥の徹底したリアリズムを根底に持った変幻自在の演技が想像される。**

5. なぜ名張は「観阿弥創座の地」で、名張市駅前に「翁面を持つ観阿弥の像」があるのか。

『申楽談儀』(22条)「面のこと」

翁は日光打。弥勒、打手也。此座の翁は弥勒打也。伊賀小波多にて座を建て初められし時、伊賀にて尋ね出だしたてまつし面也。…S45/7 までは名張市小波田での創座は信じられていた。

香西精「伊賀小波多」『続世阿弥新考』S45/7…「伊賀小波多にて」は次の「伊賀にて」の注記が本文に混入したと解釈して観阿弥の伊賀創座説を否定

表章『世阿弥禅竹』(S49/4)「“コノ座ノ翁面ハ弥勒打デネ、伊賀ノ小波多デ、ソレハ座ガ建テラレタ時ノコトナンダガ、ソノ時ニ伊賀デサガシ出シタ面ナノダ” といった調子の話を筆録者の元能が談儀 22 条の形に書いたとも考えられるとして、香西説に賛成。

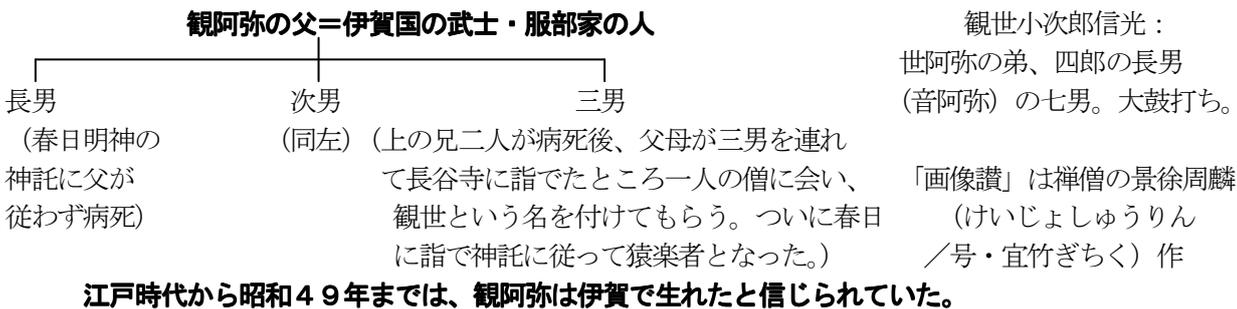
梅原猛著『うつぼ舟Ⅱ—観阿弥と正成』(角川学芸、平成 21 年 1 月)が小波田での創座を認める説提出。

『申楽談儀』22 条「面のこと」を素直に読めば、観阿弥が伊賀の小波多で猿楽の座を立て、その時探し出したのが弥勒の打った翁面であるという風にしかとれない。…(中略)…表章氏は、観世の由来に対する二つの重要な文書である『観世小次郎画像讚』ばかりか『申楽談儀』まで否定しているのである。これは文献学者として到底許されないことである」

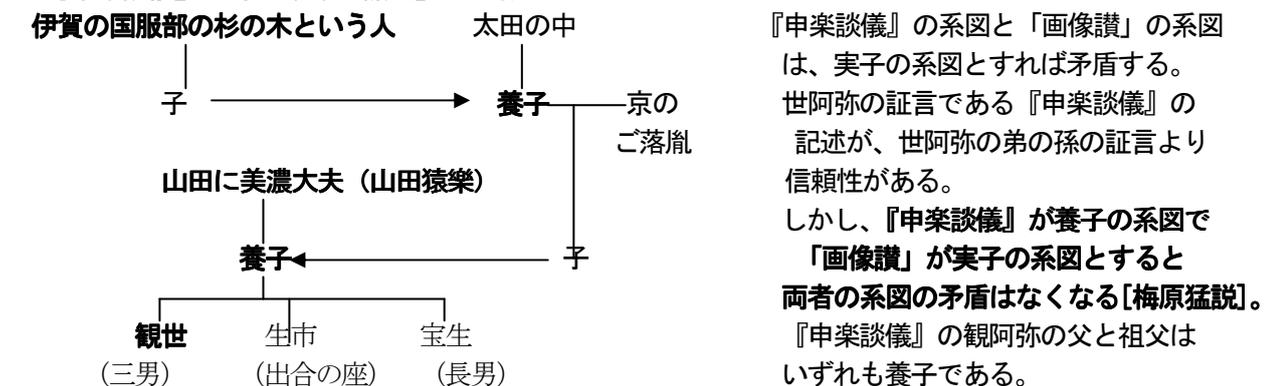
6. 観阿弥はどこで生れたか、父は伊賀の武士か猿楽師か。

[観阿弥の父と兄弟に関する二つの歴史史料]—伊賀説と大和説の対立

(1) 『観世小次郎画像讚』の図解



(2) 『申楽談儀』23 条「猿楽の諸座」の図解



『申楽談儀』23 条の本文 「京にて落胤腹に子を儲く。其子を、山田に美濃太夫と云人、養じて有しが、三人の子を儲く。」

(3) 観世家の歴史の原点が「画像讚」から『申楽談儀』に変化

- ◆ 明治 42 年 2 月、吉田東伍博士『世阿弥十六部集』刊行…平成 21 年は 100 年目の記念すべき年
- ◆ 能勢朝次氏『能楽源流考』(昭和 11 年) …『観世小次郎画像賛』は観世家の家譜によって記す旨を述べているが、小次郎時代の観世家譜と言えは信じるに足る如く考えられるかもしれないが、世阿弥自身の談話に比しては資料

としての価値は遥かに劣るものであるから、談儀の所伝を以て正しきものと判断しなければならない」…これが能楽学界の現在の「定説」。

◆ **香西精「観阿弥生国論再検」**（『能楽研究』昭和49年）→**観阿弥は大和で生まれたと結論。**

観阿弥出生伊賀説の基になった「画像讚」は「伝統的に根深い猿樂賤視の風習のもとに養われた劣等感から、観阿弥を伊賀侍の名門服部家の御曹司にまつり上げた系図買いの変態で、神話的な文学作品で信用できない。」

観阿弥の出自についての「唯一無二の資料」である『申楽談儀』23段で、山田申楽が大和申楽の話の中に見えていること、山田申楽の後身が出合座であり、出合は大和香久山付近の地名であること、同じ大和の竹田座や宝生座と出合座（山田申楽）が古くから縁戚関係にあったこと、などの条件を考慮すれば、山田申楽は、はじめから大和申楽の古い一座であったと考えるのが至当であり、山田は大和の山田、それも出合の南、多武峰の西北麓、山田寺のあった地に拠ったものだろうという能勢博士の説に従うべきが当然であろう。

(4) **平成18年に、梅原猛先生に「中世・能楽・世阿弥・上嶋家文書」が取り憑く。**角川学芸 WEB マガジン「うつぼ舟一能芸と世阿弥」を平成18年7月より執筆開始。→平成18年10月梅原先生と尾本面談。

【観阿弥出生伊賀説を否定する香西精氏と表章氏の徹底批判】

(5) **梅原猛先生の伊賀市・名張市の能楽史跡のフィールドワーク**（平成20年4月6日）

梅原猛先生、角川学芸 WEB マガジン「うつぼ舟一能芸と世阿弥」の平成20年6月～12月で、**観阿弥伊賀生国説と観阿弥小波多創座説と上嶋家文書の正しさを力説開始。**

「『申楽談儀』は養子の系図」「画像讚は実子の系図」

(6) **梅原猛著『うつぼ舟Ⅱ—観阿弥と正成』**刊行（角川学芸、平成21年1月）

「私は「上嶋家文書」及び久保論文は、今後の観阿弥・世阿弥研究家の必読書であると思う」

梅原先生は表章先生に論争を仕掛ける→表先生は受けて立ち、平成22年9月にぺりかん社より『**昭和の創作「伊賀観世系譜」—梅原猛の挑発に答えて**』（表章著）刊行。表章先生は2010年度の恩賜賞・日本学士院賞受賞後、2010年9月7日に逝去。

7. 「上嶋家文書」の紹介

①伊賀市の上島剛氏所有の江戸時代後期の観阿弥・世阿弥に関する系図を主体とする文書。昭和32年発見。

②吉川英治の『私本太平記』（昭和33年より毎日新聞に連載開始）、杉本苑子の『華の碑文—世阿弥元清—』（中央文庫、昭和52年）、秋月ともみの『観世三代記 秘すれば花—歴史の襞にかくれた一族—』（ぶんりき文庫、平成13年）がベースとして参考にした基本文書。

③鹿島守之助氏（鹿島建設の元会長・参議院議員：鹿島家の養子、播磨の永富家出身）に、氏が世阿弥の母親の子孫であることを認識させ、観阿弥創座の地記念碑・世阿弥公園・世阿弥の母親の像を建設させる。

◆ **清次—観阿弥の父母の情報がある。**

始観世丸三郎、**実父伊賀国浅宇田領主上嶋慶信入道景守次男治郎左衛門元成**、三男、杉内生、長谷猿樂法師預人、後市太夫家光養子也、法名観阿弥、**母河内国玉櫛庄楠入道正遠女**、観阿弥文中甲寅歳京起、父母家筋秘鹿苑殿前能座立也

・ **文中甲寅歳（応安7年、1374）**—今熊野猿樂の開催年の学会の有力説の一つと一致

〔『申楽談儀』と上嶋家文書の類似点〕

仲滋 小田住中七郎泰信後備中入道始太田氏村嶋仲滋一家信 杉之木家長子太田七郎仲滋養子

一家光 山田猿樂族滅小美濃云人続後多武峯山法師越智海享殺此跡家光住也 — 子
杉之木という人の息子=家信、おうたの中=太田七郎仲滋、 — 子
観阿弥の父=家光 — 清次

◆ **元清—世阿弥の生年・生まれた場所・母・兄「季次」の情報がある。**

清次—季次 童名藤丸正平乙未歳三月生上嶋館預人後改季宗杉内生

—**元清** 小名清太、**正平癸卯十八歳**（貞治2年）長岡上嶋館生、**母小馬多領主竹原大覚法師女**

〔屋敷図中の追記〕「**下島因幡屋舗コノヤシキ元清入道正平十八歳霜月十二日生、母播磨国揖保庄永富左衛六郎女、小馬多竹原預り子、朝屋福北姪ナリ**」

◆ **元雅—通説：世阿弥の長男**

「**十郎元雅伊勢国津木造殿屋舗足利家徒斯波兵衛三郎云者殺**」 **元雅は暗殺された!**

・永享2年（1430）元雅、天河弁才天社に尉面奉納

「心中所願 成就円満也 永享二年十一月日観世十郎敬白」

・永享4年（1432）**元雅、安濃の津で早世**(8/1) 哀悼書『**夢跡一紙**』筆者：至翁（世阿弥）

以上